

新見市千屋の「千屋アウトドアハウス」取材レポートをお届けします

(2006年07月24日)

新見市千屋に新しくできた、アウトドアの拠点、「千屋アウトドアハウス」の取材レポートをお届けします！



田舎家の風情ある屋内には囲炉裏が切っており、千屋牛やヤマメ、野菜の炭火焼き・郷土料理が味わえます。また、新見ならではのアウトドア体験「洞窟体験」ができます。岡山の洞窟は井倉洞・満奇洞が有名ですが、こちらでは観光洞窟ではない洞窟を案内してくれます。ヘルメットに懐中電灯を片手に、探検気分が満喫できます。近隣では、高梁川源流での水遊びや溪流釣りが楽しめます。千屋温泉もありますし、いいところですよ。

「千屋アウトドアハウス」取材レポート

☆洞窟と囲炉裏の宿と、地域おこし☆

新見市街から約25分、新見市千屋花見地区の国道沿いの山あいの里に、「千屋アウトドアハウス」はある。ぽつぽつと民家が立ち並ぶ中、一軒の民家を訪れると、鈴木夫妻が揃ってにこやかに迎えてくれる。



「アウトドアハウス」というと洋風の山小屋を想像するが、ここは「宿」ということばがふさわしい。千屋花見地区の旧家が所有する、築90年の古い民家を改装しているのだ。ガラリと引き戸を開けると、ひろい土間があり、あがりかまちの向こうに、囲炉裏が見える。なつかしい昔の田舎家のたたずまいが残り、この家に昔からあるという調度品が迎えてくれる。まるで、一昔前にタイムスリップしたような心地がする。



アウトドアというと、何を連想するだろうか。ここは、新見。ここにしかない、ここでしかできないアウトドアレジャーがある。それは、洞窟探検だ。日本には3大洞窟地帯というものがあるがご存知だろうか。1つは、山口県の秋吉台、1つは沖縄、そしてもう1つは新見である。新見では、井倉洞・満奇洞が有名だが、それ以外にも大小あわせ約200もの洞窟がある。それらの洞窟については観光化されておらず、岡山県内でもその事実を知る人は少ない。当然である。そんな観光化されていない洞窟を素人が探検することはとてもできない。

しかし、アウトドアハウスの主人の鈴木氏のガイドがあれば、安全に洞窟探検が体験できる。ヘルメットをかぶり、懐中電灯を持って、時には膝をつき、洞窟の中を進む。子供の頃、冒険小説を読み、洞窟の中や地下の世界といった未知の世界に心躍らせたことはなかっただろうか。洞窟探検は、ひと時、子供の頃のみずみずしくわくわくした気持ちに帰ることができる。



宿の主人・鈴木氏と新見の洞窟の出合いは15年前に遡る。その頃、鈴木氏は大阪の観光会社に勤め、日本を始め世界各地を飛び歩いていた。この頃世界の洞窟も訪れたという。15年前といえば、ちょうどバブルの終わりごろ、まだ人々か浮かれ気分で、バブルがこのまま続くという幻想を抱いていた時代だ。日本各地に、豪華なビーチ、ホテル、乗馬倶楽部、ゴルフ倶楽部ができる時代だった。しかしながら、鈴木氏には、これからはもっと違うものが求められるのではないかと、という気持ちが、もたげ始めたという。

そんな折新見を訪れ、転機が訪れた。まったく縁のなかった新見に、「洞窟と、囲炉裏の宿」を結びつけると面白いのではないかと、という構想を持って、一人新見に乗り込んでくることになるのだ。

カツマル醤油の岡本社長とは、その当時以来のつきあいという。岡本社長に第一印象を聞くと「なんやこれ、何を言っとんかなあ、変人だと思った」となつかしそうに笑った。しかしながら、鈴木氏の真摯な人柄に人が集まるのだろう、この仲原家を借り受けることができ、「洞窟と、囲炉裏の宿」構想の弟一歩が始まった。

以後、時代の流れの中で、まちおこし、グリーンツーリズムという流れが生まれてきた。新見にも「かのさと体験観光協会」ができたたり、街おこし・地域おこしの仲間も増えたりと、土壌も整い、鈴木氏の構想は着々と現実になりつつある。



さて、アウトドアハウスの楽しみは、洞窟探検のほか、自然の中で遊ぶハイキングや登山、溪流釣り、スキーな

ど数々あるが、魅力的な「食」を忘れることはできない。昼間、外で思い切り遊んだ後、千屋温泉でひとつぶろ浴び、囲炉裏を囲んで夕食である。取れたての地元の野菜や、山菜を使った郷土料理。そして、囲炉裏に炭をくべて網をかけ、その上で旬の野菜や、名産の千屋牛を焼く。

時にもくもくと煙が上る、その先を見上げると、立派な梁がどっしりと、家を支えている。年季が入ったもので、すすで黒光りがしている。この千屋の山から切り出した松だという。この家は築90年、明治時代からずっとこの家を見守ってきたのだろう。この囲炉裏をどれだけの人が囲み、どのように楽しんだのか、ひと時思いを馳せる。

もうよからう、と、千屋牛の焼き具合の頃合を見計らって、地元・新見のしょうゆを、ひとたらし、ふたたらしすると、香ばしい匂いが辺りにただよふ。千屋牛は非常に柔らかく、風味がよい。炭火で焼くと、また格別の味わいだ。しかし、いろいろと蘊蓄を言うのは野暮というものか。地元の野菜や山菜、千屋牛を食していると、自然の力づよい生命力をいただいているのだ、と強く感じずにいられない。



囲炉裏を囲み、みなで食べて飲んで、こころゆくまで語り合う。聞けば、この宿は、この10年間は仮オープンだったという。お客は、鈴木氏の知り合いか、新見でもごく一部の人にしか知られていない隠れ家であった。しかし、今年4月のゴールデンウィーク前、千屋アウトドアハウスは本格オープンした。その陰には、昨年11月に結婚された、屈託のない奥様の存在がある。2人揃って迎えてくれ、もてなしてくれる姿に、心あたたまる思いがした。鈴木夫妻のあたたかな夫婦のつながりを目の当たりにすると、夫婦とはいいものだな、と改めて感じる。

10年後、20年後、千屋や新見はどうなっているのだろうか。鈴木氏は、「宿というものが、ぽつんとあるのではなく、宿を含めた地域を盛り上げていきたい」と、語る。

ここには、美しい自然があり、田舎ならではの、ゆるやかな時の流れがある。都会に住んでいる人も、自然に親しみ息を吹き返す時間が必要だ、と思うことは多いのではないだろうか。田舎で2,3日過ごしたい、できれば1週間くらい住んでみたい、という人もいるはずである。田舎は、そういう時に、人々をあたたかく迎えることができるような、受け皿を作っておく必要があるのではないだろうか。

「千屋アウトドアハウス」には、あたたかな人のつながりを育む場がある。それを懐かしく思い、恋しがる人もあるだろう。ここを拠点に、新見を愛する人々が集い、また散り、新たな仲間や家族を連れて戻ってくる。人と人との出会いが生まれ、交流が広がっていくだろう。

「人や土地とのあたたかなつながり」で受け継がれていく「田舎」。これからの、「田舎」のありかたの一つではないだろうか。「田舎」とはなんだろう。豊かな自然と、その恵みとともにあり、人をまるごと受け入れてくれる場所。ふっと気持ちをゆるめて、ほんとうの自分に出合える場所、その人の「心のふるさと」と繋がる場所ではないだろうか。